# 夏祭り再開にあつまる若者たち どのように大阪を未来へ伝えるだろう

司馬遼太郎『花神』の主人公・村田蔵六（大村益次郎）は、「今日はお暑うございますな」と挨拶する人に、「夏は暑いのはあたりまえです」と返したという。しかし、今年は、梅雨明けは早かったのに豪雨が続いたり、蝉の声が聞こえるのも遅いなど、あたりまえの夏とは言いがたかった。

そう感じた背景には、コロナや熱中症対策で部屋にこもって仕事をしていたことが、気持ちのありかたにも影響したのかもしれない。そんな心理状態のもたらしたものだろう、パソコン作業を休めて、窓外の入道雲を眺めていると、不思議と思いだしたのが半世紀も昔、小学生のころの夏の日々であった。

昭和39（1964）年の東京オリンピックの年に私は小学校にあがり、昭和45（1970）年の大阪万博の年に中学生になった。以前にも書いたが母校は、大阪市立道仁小学校（現・大阪市立南小学校、大阪市中央区）である。校区内には金物関係の問屋が多いとともに、ミナミに隣接するので繁華街のにおいも漂う地域であった。

そんな小学生の夏休みの生活は、朝早くのラジオ体操や、学校のプール開放に参加してスタンプをもらうことで始まった。少年のスタイルと言えば、半ズボンにランニングシャツである。毎日ともだちと遊んで、汗だくになったシャツは黒くよごれた。

道仁小学校の体育の時間。校庭の向こうが塀に囲まれた空き地だった。

町内には板塀で囲まれた空き地が何カ所もあり、塀の隙間からもぐりこんで、捨てられていた板やトタン、ダンボールで秘密基地を作った。主人公が私より二つ年下である浦沢直樹『本格科学冒険漫画20世紀少年』にも、夏休みに空き地に作られたこどもたちの秘密基地が登場する。

時代は高度成長期で、空襲で焼けたまま残された空き地であったとは思わないが、雑草が生い茂った当時の空き地を思い出すたびに、「勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたり」とする、梶井基次郎『檸檬』の裏町の情景を連想する。空き地では虫もとったし、管理人に怒られたり、野良犬にも出くわした。

また夏の楽しみが、地元の高津宮の夏祭りであった。勇壮なだんじり囃子が鳴り響き、夜店のほか、お化け屋敷が二軒も出ていた年もあった。8月には夜の校庭で、映画上映会や盆踊りが催された。提灯を吊った櫓の周囲を、「ドンパン節」や大阪万博の「世界の国からこんにちは」で踊っていた人影が浮かんでくる。

その後、バブル時代に空き地は「更地」となり、現代ではコインパーキングに置き換わって、私の記憶にある少年時代の空き地は消滅した。冷房の効いた部屋から雲を眺め、ランニング一丁で町内を駆け回った夏の日のことを考えていると、歴史を計る物差しが、いつの間にか自分の人生そのものを目盛りに刻んでいることに気がついた。

今夏、高津宮ではコロナ以来、自粛していた夏祭りが再開された。発見したのが、以前にまして境内に小学生や中学生が多いことである。自粛からの開放感や、都心にマンションが増えたことにもよるのだろう。

こうした若い新しい“大阪人”にだんじり囃子はどのように響いているのだろうか。半世紀先の夏の日、彼らは、躍動するだんじり囃子のビートをきいて、私が半世紀前を回顧したように、夏祭りが再開された令和4年の少年時代の夏を思い出すだろうか。

現在、大阪市で用いられている副読本『わたしたちの大阪』（日本文教出版、令和2年度版）

カレンダーが9月に変わった。やり残した夏の宿題はないか。私は小学校で大阪の歴史や街を副読本や地図で学んだが、夏祭りに集まったこどもたちが、大阪の歴史や文化に興味を持ち、誇りを持ってそれを未来に伝えていくためのバトンタッチを、私はまだ十分していないような気がしはじめた。

筆者プロフィール

橋爪 節也　はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院人文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。